



陵辱本  
ふたなり紫

Adults Only  
R18  
Only



■注意

この本には以下の成分が含まれております。

- ・ゆかりんがふたなり
- ・よっちゃんが外道
- ・ゆかりんが一方的に酷い目に遭う
- ・そしてバッドエンド

アレルギー持ちの方は気をつけてください。

「目が覚めると、そこは見知らぬベッドの上だった。  
「はっ……なにこれ……どういこと……」  
突然の出来事に頭が回らない八雲紫。  
落ちていて昨日の出来事を思い返して……が、  
自分がこんなところにいる理由はさっぱり見当がつかない。  
「……一体ど……よ……」



ガチツ

「えっ!?」

起き上がって辺りを見渡そうとして、紫は自分の状態に気がついた。

「な……なんで……」

紫の両手両足に金属の枷がはめられているのだ。

枷はベッドと結合されており、紫は完全にベッドに拘束されている。

さらに、その身体は一糸まとっていない状態である。

「……だ……誰よ!? こんなふざけたマネをするのはッ!」

「ははははは! ようやくお目覚めか八雲紫!」

「緋月依姫!?」  
「久しぶりだな!八雲紫。」  
突然の状況に混乱している紫の前に現れたのは、緋月依姫だった。



「ふふ…いい様だな…気分はどうだ?」  
「……最悪ね…なんのつもりか知らないけど…これ解いてくれるかしら?」  
先程まで犯人に対して怒り心頭だった紫だが、それが自分より圧倒的に実力のある月人であること知り、焦りと恐怖が生まれる。  
「ふん 貴様はなぜ自分がこんな状況になっているのか理解していないようだな。  
八雲紫、貴様が過去に二度、月に侵攻してきたことは覚えているだろう。」  
「それがどうかしたのかしら?」  
「我々にも面子があつてな。地上の妖怪に二度も侵入を許したとあつては示しがつかんのだよ。」  
「別にいいじゃない!一度目はあんた達の圧勝だったし、二度目だって被害はお酒ごとくでしよう!」  
「ま、そつだな。ただ、二度目が無いとも限らないので、貴様は月に永欠に拘束することに決定した。」  
「はあ!? 拘束ってどういう…!」

「そんなことよりまだ気づいていないのか?」  
「貴様の股間に面白いものが生えているぞ。」  
「え……?」





「……なっ?!? なんな…なんなのよこれは!?!」

「はは、わからないのか? ペニスだよ!」

紫の股間からは明らかに男性器が付いていた。

「い…いやあああ!! どうしてこんなものが私に生えてるのよ!?!」

取っでよ!! 取りなさいよおっ!!」

「ふふん、それはできんな。さつきも言ったが貴様はもう月から出ることはできん。

地上の妖怪に人権などないからな。

ククク…せつかくの機会だから色々遊ばせてもらおうと思ってるのだよ。」

それを聞いて紫の血の気が引いた。

おそらくこの月人は自分を拘束するだけでなく、その間、好き勝手に身体を弄ぶ気だ。

「な…何を言ってるの…?!? そっ…そんなことしなんの意味があるのよ!」

「なに月に手を出すことがどういうことかわからせるためだよ。」

「そ…そんな…」

「さて…まずはその新しくできたペニスが何回射精するか試してみようか。」

「ひっ…嫌っ…謝るからやめて!」

「あぐああああ！ も…もう無…理…  
ああああああああああ…！…！…！…！…！…！…！  
「ほらほら、まだ出るじゃないか。」

あれから紫は、四肢をベッドに拘束されたまま、  
数十分に渡って延々とペニスを責められていた。

「ツツもう無理ッ！ 出ないからあああ！  
やめつてつええええ！ ああああああ…！！」

「何が無理なんだ？ まだ元気に勃起しているように見えるが  
ほら、失神するまで射精してみろっ！」

そう言つて依姫は、紫のペニスをさらに乱暴に扱き上げる。  
「いぎいいいー！ 無理！ 死ぬ！ 死ぬ！ やうウウウー！！」

ジュル

にちや

にちや

ジュル

あが

あが

あぐ

もも  
やめ



「……はあ……はあ……」

「ははは。見ろ、たっぷり出したな。どうだ？ 気持ちよかっただろう？」

あれから紫は一時間近く男性器を責められ続け、何度も強制的に射精させられた。既に体力も尽き、息も絶え絶えの状態である。

「よし、八雲紫をベッドから降ろせ。連れて行くぞ。」

「……う……どこに連れて行くのよ……？」

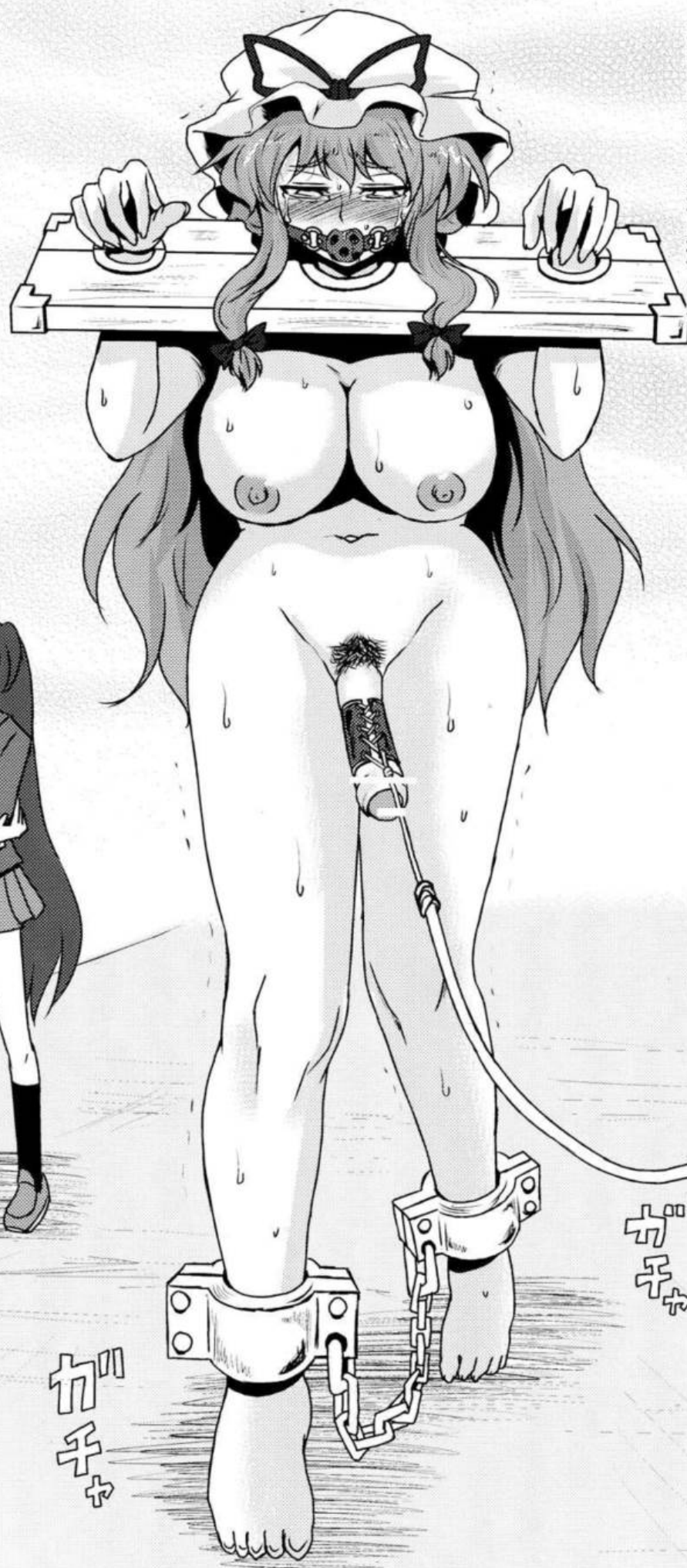
「兎達が貴様につけたペニスに興味津々でな。扱いを任せることにした。これから貴様は晒し者にされ、実験台にされ、モルモットのように扱われるんだよ。せいぜい可愛がつもらうように媚びるんだな。」

「……そんな……」

ドロオ



「ほらしっかりしろ、早く歩かないか。」  
「ふぐぐ……！」  
ベッドから降ろされた紫は、既に抵抗できる体力は残っていないが、再び両手両足を拘束され、口にはギャグボールを噛まされた。さらに、依姫が手に持っている手綱は、首ではなく紫のペニスに繋がれており、股間を引かれて歩かされている。



ガ  
チ  
ャ

カ  
チ  
ャ

「ねえ…あれ、例の地上の妖怪の…」  
「うわあ…全裸じゃない。よくあんな格好で歩けるわね…」  
「みてあの股間の気持ち悪いもの…」  
地上の妖怪はみんなあんなものぶらさげてんのかしら」  
「あー、あれは依姫様に付けられたんだって。」  
「えーほんとー？」  
紫が連れて行かれていた間、何人もの月兔とすれ違い、そのたびに紫は好奇の目に晒されて、羞恥に震える。





「これが例の実験で付けた男性器ね。」  
「うわ〜くろ〜い、写真撮つと。」

紫が連れてこられた部屋には数十人の月兎たちが待つていた。  
紫は部屋の中央の台の上に乗せられ、  
股間の男性器をさらけ出す体勢で、両腕と膝を固定された。  
髪の毛も天井に吊るされ、身動きが出来ない状態だ。

「早く勃起させちゃおうよ」

「あ、私がやるやる〜」

「んっ?!? んぐっ! んぐっ!」

ペニスをいじられ、紫はその刺激に徐々に勃起していでしまう。

「うわ! 勃った勃った!」

「わー変態〜。あはははは。」

兎達に痴態を晒され紫は涙するしかなかった。

「ね、何してみよっか。」  
「そうねー、もう射精させるのも飽きたつたし……」  
「そうだ、おしっこさせてみるのどう？」  
「あはは、それおもしろそう！」

あれから数時間、紫は身体中を月兎たちに好き放題されていた。  
特にペニスへの興味が一番強く、様々な陵辱を受けていた。

「ほらっ！ おしっこしなさい！」  
「んぐっ……」  
「ほら！ 早く出さないとまたおちんちんにお仕置きしちゃうよー」  
兎の一人が取り出したものは、

身体に貼り付けて電気による刺激を与える低周波マッサージ器だ。

「またそれ使うの。面白かったよねー。」  
電圧上げるたびに身体ビクンビクンさせで。」

「んぎゅっ！ んんっ！ んんん！」

それを聞き紫は強引に下半身に力を入れて、放尿した。

「おしっこ……おしっこ……おしっこ……」

つうー

つうー

じよほほほほほほほ

「はいチーズ」  
カシヤ

兎達に散々弄ばれ、既に紫のプライドはボロボロだった。  
今もカメラの前でポーズをとるように強要されており、  
逆らうと酷い目にあうため、紫はおとなしく従うしかなかった。



「あー面白かったー」

「じゃあ記念撮影も終わったし。」

「えっと、これから依姫様に引き渡すんだっけ」

「違う違う。今度は研究室に持つてくの。」

「あー研究班の奴らなのとこ？ うえー何されるんだろううねー」

「あいつらやるのがぶっ飛んでるからねー」

カシヤ

「んんーっ!!  
んっ!んーっ!!」  
「射精しました。前立腺の機能は正常ですね。」

別の部屋に連れて来られた紫は、  
分婉台の様な椅子に拘束され、  
先ほどとは異なる研究員のような月兔に、  
身体を弄られ、データを取られている。

「感度のほうはどう？」

結構高めにつくつてるみたいだけど。」

「良好ですね。これ以上上げると

触れただけでイクかもしれないし、

ちよつどいいんじゃないでしょうか」

「この研究員は

紫に男性器移植を行ったメンバールで、

手術の成果と次回のための

参考データの取得を行っているのだ。

「次は前立腺刺激のみよる

オーガズムの限界をテストします。」

「んっんっんっ!!」



「んぐいつんんぐううううううううー!!」  
 「どうかしら?」  
 「性的快感は得ているように見える?」  
 「うーん微妙ですね。」

「まだちよと苦痛のほうが  
 大きいんではないでしょうか。」

今行われているのは  
 尿道に刺激を与えるテストである。  
 紫のペニスは勃起した状態で位置を固定され、  
 ボリルのような器具から、  
 尿道にシリコン製の棒が抜き差しされている。  
 「んぐううううう!!」  
 「んぐううううう!!!」

「やはり尿道の感度を高めにするべきでしたかね。」

「いいんじゃないの?」

徐々に苦痛を快楽に変えていく過程も楽しいですよ。

このまま尿道責めだけで射精できるようになるまで調教しましょう。

今のシリコン製に慣れてきたら徐々に太く、硬い素材に換えていって。」

「了解しました。」

んぐうううー!!

「んぐうううー!!んぐうううー!!!」

数日に渡る実験が終わった後、紫は別室で拘束され放置されていた。天井から吊るされた状態で、男性器に搾精機をつけられ、休むことなく精液を搾られ続けている。射精を促すように、肛門と女性器にはパイプを入れられている。

「んぐうううー!!んぐうううー!!!」  
実験による投薬の効果から、既に紫は何十回も射精をしているが、いっこうに萎える事は無かった。  
二十四時間与えられ続ける性器への刺激に、紫は眠ることさえ出来なかった。

ジュ木  
ジュ木  
ジュ木  
ジュ木



「八雲紫の状態はどうだ？」

「依姫様。はい、

今のところほとんどの責めに対して耐えております。

一部苦痛を感じているものもありましたが、

調教次第では快楽に変えることも

可能という結果が出ております。」

「そうか。じゃあアレは使えそうだな。」

「はい。」

「くっくっ…アレを使うのは私も見てみたいからな。

準備を急げ。」

「了解。」



「ふふ…調子はどうだ？八雲紫  
兎達には可愛がつてもらったか？」

「すっかりおとなしくなったな  
まあちようどいい。」

「今日は貴様に紹介したいモノがいるんだよ」

「…」  
「そう言いながら、依姫は部屋の明かりをつける。」

「…」

「明かりをつけたそこに居たモノに、紫は絶句した。」

「部屋の中央、ガラス張りのケースの中に、  
ぐちよぐちよとうねる触手の塊が居たのだ。」

「これはうちの生物研究班が  
軍事情につくった生物のプロトタイプだ。」

「こいつは捕食対象を捕らえると、  
触手で捕らえ身動きが出来ないようにし、  
獲物の体液を吸収するんだよ。」

「もうわかるか？八雲紫、貴様にはこいつの餌になってもうらう。」

「んぐっ！んぐっ！んぐっ！」

「心配するな。死にはしない。」

「んんん？」  
「こいつは餌となる体液の種類を覚えさせることが出来てな。  
幼生期に特定の餌のみを与えると、成長しても同じものしか食わなくなる。」

「…ふふ…じゃあコイツは何を食わせて育てたと思う？」

「既に想像がついている紫は、絶望に体を震わせる。」

「お前の精液だよ。」





「くくく、こいつには実験で貴様から採取した精液を与えている。  
まあ別に精液であればなんでも構わないんだが、  
貴様にはこれからはらくこいッの餌になつてもらう。」  
んんんんんん



抵抗することのできない紫に触手が伸びる。  
しばらく身体をまさぐっていたが、臭いで気づいたのか、  
紫の股間へと触手が伸びてきた…

「よし、降ろせ。」  
「んんー!!」  
両手両足を鎖で繋がれた状態で、紫は触手のゲージの中に吊るされた。  
そのまま、触手の届くところまでゆっくりと沈んでいく。  
「んぐっ、ううー!!」  
「ははは、精液なら心配しなくてもいいぞ。  
半永久的に出し続けることができるようにしてある。  
安心して餌になってくれ。」

触手は紫の身体を這い、  
餌となる精液の分泌箇所を探している。

「んぐり」

一本の触手が紫のペニスに巻きついた。

「んぐう！んぐううう！」

触手の与える快感に反応し、  
紫はすぐに射精してしまった。

射精させる方法を触手が学習してからは、紫のペニスを集中的に刺激し始めた。

「んんんんぐううあああー！ツツツ！」

ペニスだけでなく、精液の分泌主である紫の反応を見て、

女性器や肛門、乳首なども責め、より精液を効率よく搾取しようとする。

「んぐくうううううー！！」



数日後

「んぐ……んぐ……!!」  
大量の精液を吸収して満足したのか、  
触手の紫への責めは落ち着いてきた。

しかし、餌から逃れられるわけでもなく、  
紫はもはや拘束具がなくとも触手に完全に  
取り込まれ、  
触手の気まぐれで精液を搾取されている。  
「んぐ……んぐ……!!」

「依姫様、触手は完全に成熟してしまつたため、  
これ以上の進化はないと思われませんが、  
いかがいたしますか。」  
「……ふむ、そうだな。  
まだ別の触手がいただろう。  
次はそつちのゲージに入れてみてはどうだ？」  
「わかりました。」

「くつくく……いやあ、よく頑張ったな。八雲紫。」

あれから数週間、紫は触手たちの餌にされ続けた。強制的に精液を出させられ続けて、紫はすでに指一本動かせないほどに疲弊している。

「ふむ、もう少し身体を頑丈に改造すべきかもしれないな。まあいい。八雲紫、貴様の身体で試したいことは終わりだ。もう貴様は用済みだが、地上に帰られる訳にはいかないので、始めに言ったように拘束させてもらっぞ。おい、連れて行け。」

数ヶ月後

「あれから八雲紫の様子はどうか？」

「はい。しばらく研究室が実験に使用していましたが、すぐに飽きられてしまって、現在は搾精装置内に拘束して放置しているようですね。」

「ふ…まあ使い道などそんなにないな。くれぐれも逃亡だけはさせないようにしろよ。」

「はい。」

カツ

カツ

カツ



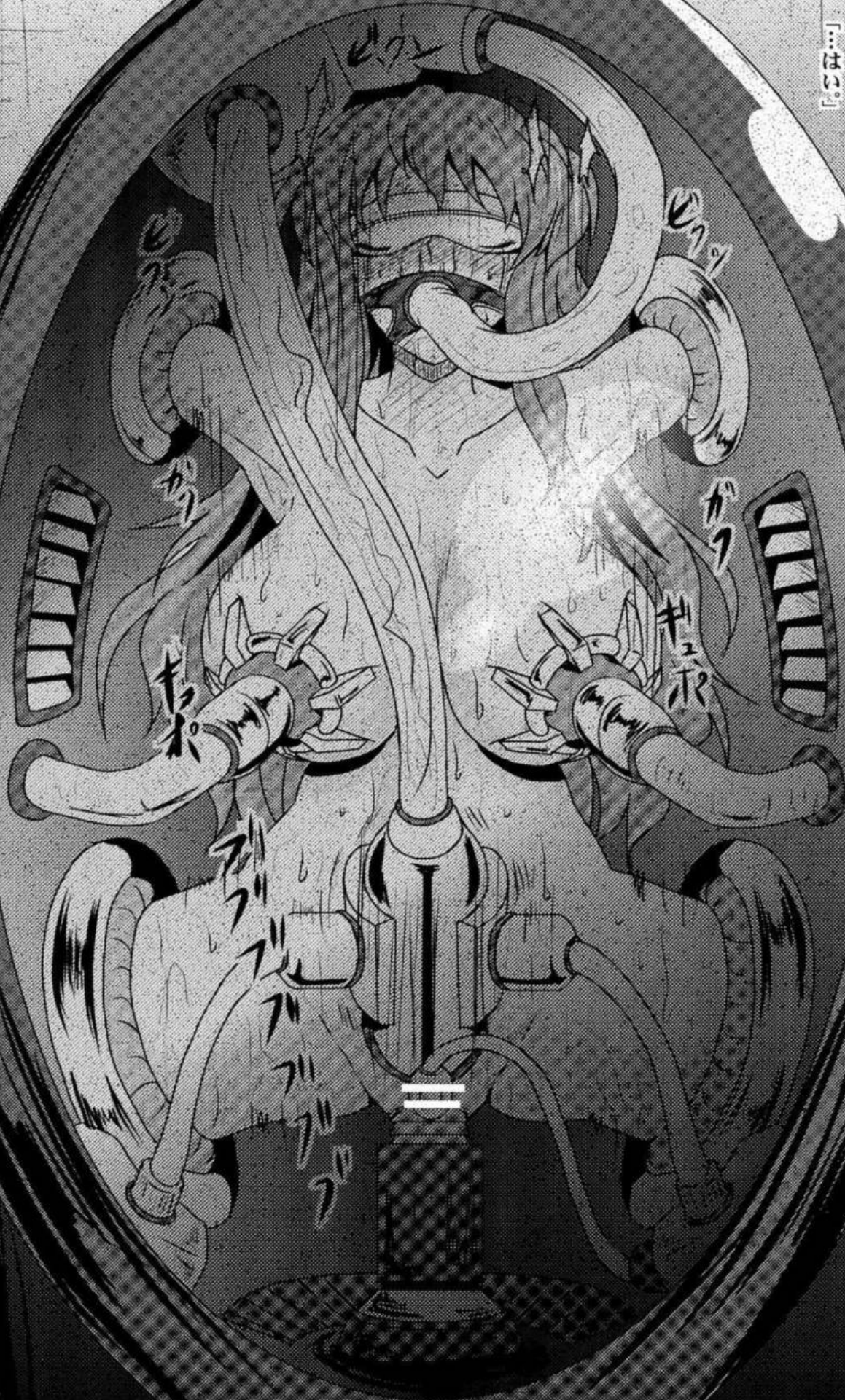




「ほお、この機械はこのためだけに作ったのか？」  
「そうだな。まあ既存のマシンの寄せ集めだそうだが、  
研究室からの報告を元に開発部で作製したそうだが、  
男性器をはじめ乳首、肛門、女性器、陰核等、あますとこなく責め、  
対象を刺激に慣れさせないように、脳波を検知し各端末の制御を自動で行なっているとか。  
栄養供給と排泄も口と肛門のチューブから自動で行うため、  
半永久的に生存させることが可能だそうだが、  
この機械はなかなか使えそつたな。」  
「地上から攻めてきた奴は残らずこいつに入れてしまおう。」  
「どうしまじよう。八雲紫と会話するには装置を停止させる必要がありますが、  
いや、必要ない。」

「どうして？」

「このままここで、永遠の快樂の中に居させてやるわ!!」  
「……!!」





終

■奥付

『ふたなり紫陵辱本』

2013年5月26日 第十回博麗神社例大祭

発行 きしまさ  
(夏色テラス)  
<http://kishimasa.ohuda.com/>

印刷 (有)ねこのしっぽ

原作 上海アリス幻楽団「東方project」



夏色テラス  
2013